授業科目名： 聴覚障害教育総論	教員の免許状取得のための必修科目	単位数： ２単位	担当教員名：喜屋武　睦 担当形態：単独
実務内容 （実務家教員の場合）			
科　目	特別支援教育に関する科目（免許状に定められることとなる特別支援教育領域以外の領域に関する科目）		
各科目に含めることが必要な事項	・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目 ・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目		

「学位授与の方針」との関係

わが国においても障害児者に対する社会的関心は高まりつつある。そうした中で、大学ディプロマシーに定められた教育理念「人と人、そして人と自然とが共生する社会の創造に貢献する」ことを目指し、当事者及び周囲の環境に視点を置き、障害に起因する困難について考察することは重要な今日的課題である。

授業の到達目標及びテーマ

（１）聴覚障害の基礎的な生理病理的特徴、聴力検査について理解する。
（２）聴覚障害児のコミュニケーションについて理解する。
（３）聴覚障害児の言語発達とその支援について理解する。
（４）聴覚に障害があると学習上、社会生活上、心理上にどのような影響を及ぼすのかを理解する。
（５）乳幼児から成人に至るまで、どのような課題があり、どのような支援が行われていくのか、歴史的背景を踏まえて理解する。

授業の概要

聴覚の障害は、単に音が「聞こえない」あるいは「聞こえにくい」障害と理解している人がほとんどである。しかし、日常生活の中で聴覚的情報の入力が制限されていることは、聴者が想像する以上に厳しい状況にあり、多様な障害の中でも誤解されている面が多々ある。さらに、聴覚障害児者が直面する重要な問題の一つに「言語の獲得・発達」がある。そのために聴覚特別支援学校（聾学校）、聴覚特別支援学級（難聴学級）、通級による指導における指導場面では多くの教師が言語獲得・発達の支援のために多大な労力を注いでいることについて学ぶ。

授業では、聴覚障害児のコミュニケーションの発達を中心課題として、聴覚障害児教育の変遷、補聴器等の補助機器の発達、乳幼児期の両親支援や青年後期における現状と課題を紹介する。

授業計画

第１回：耳のしくみ
第２回：聴覚障害の種類と心理的・生理的・病理的特徴
第３回：聴力検査
第４回：聴覚障害児教育の歴史
第５回：　海外における聴覚障害児教育
第６回：様々なコミュニケーション方法

第７回：聴覚障害児の言語獲得・習得
第８回：聴覚障害児への言語指導法（１）理論
第９回：聴覚障害児への言語指導法（２）実践
第１０回：聾学校（特別支援学校）における聴覚障害児教育の特徴と課題
第１１回：通常の小中学校における聴覚障害児教育の特徴と課題
第１２回：様々な学び方の可能性
第１３回：障害の早期発見・早期療育と両親支援
第１４回：高等教育段階における聴覚障害児
第１５回：学習指導案の作成
定期試験

学修内容
レポートテーマ１：「授業計画」の第１回から第１５回までの学習内容について、テキストの第１章から第１０章まで通読し、自己学修する。
科目修得試験：レポートについて添削指導を受け、合格したうえで科目修得試験を提出する。

教科書
中野 善達・根本 匡文（２００８）『改訂版　聴覚障害教育の基本と実際』田研出版

参考文献
（１）日本音響学会 編『音のなんでも小事典』
（２）中村 健太郎『図解雑学・音のしくみ』
（３）鈴木 淳一・小林 武夫『耳科学ー難聴に挑む―』中公新書
（４）小寺 一興『補聴器フィッティングの考え方』診断と治療社
（５）日本聴覚医学会 編『聴覚検査の実際(第２版)』南山堂
（６）斉藤 くるみ『少数言語としての手話』東京大学出版会
（７）長南 浩人 編著『手話の心理学入門』東峰書房
（８）脇中　起余子『聴覚障害教育　これまでとこれからーコミュニケーション論争　９歳の壁・障害認識を中心にー』北大路書房
（９）我妻 敏博『聴覚障害児の言語指導～実践のための基礎知識～』田研出版
（１０）四日市 章 編著『リテラシーと聴覚障害』コレール社

学生に対する評価
レポート評価（５０％)、科目修得試験（５０％）の割合で総合して評価する。